

John Whelpton,

*A History of Nepal.*

Cambridge, U. K.: Cambridge University Press, 2005, xxiii+296pp.

かん はら たつ  
神原 達

ネパールの近・現代史に関する待ちに待った本がようやくでた。著者は謙虚にも本書の表題を“ A History ”(ひとつの歴史), としているのだが、内容は立派なものだ。何よりも著者の歴史家としての立場、すなわち著者の「史観」がしっかりしている。ネパールの近・現代史をネパール人が偏見にとらわれずに書くことはかなり難しいが、英国人である著者はそれができる。要するにネパールでは近代のラナ将軍家(マハラジャ)による100年にわたる専制政治の時代の正当な歴史的評価ができていないのだ。まして現代史となると、1960年のマヘンドラ国王による政党政治の廃止とパンチャヤット制(村・町、地方、国家と代議員を積み上げていく制度)導入による「指導された民主主義」をどのように評価するかも未確定のままだ。その後国王による独裁的な政治が続いたあと1990年の政党政治の復活、いわゆる「民主化」を迎えるのだが、政党政治は政治的に混乱したままで、国内各地ではマオイストによる政府関連施設への攻撃が続き、そして2001年の王宮殺害事件がおき、2004年のギャネンドラ国王による政党政治の廃止と三権の掌握となる。

評者はネパールの若い優秀な高校生に、自国の歴史に関して学校でどのような教科書を使い、どのような講義を受けているのかを何回か聞いたことがある。彼等、日本の外務省の招聘で訪日したネパール人学生たちはこの質問に的確に答えられず、それでも執拗に質問をすると、ある学生が答えたのは、「ネパールの歴史にはラナ時代がありますので、それが汚点になって十分に研究されていないのです。従って私たちは歴史そのものをあまり習いません」というものであった。

実はネパールの近代史に関してはネパールの歴史家の何人かが既に立派な著書を出している。たとえば、古代、中世から近代まで歴史全般を要領よくまとめたパールチャンドラ・シャルマ氏の「ネパールコ・イティハス・ルブレカ [ネパール史概観]」(ネパール語、1951年初版、1976年4版)であり、また英文で書かれた近代史としてリシュケシュ・シャハ氏の *Modern Nepal: A Political History, 1769 ~ 1996.* (1990年初版、1996年再版)がある。それらの良書をどうしてネパール人が読まないのか。また不思議なことに、その前者は本書の著者の Whelpton 氏もその参考文献に入れていないのだ。

評者が40年前、外務省の特別研究員としてネパールに滞在してまとめた「ネパールの歴史と社会」(「外務省調査月報」1966~67年各号所載)においてはその基本的な調査を先に述べた「ネパール史概観」によったのだ。その後、元駐ネパール大使の西澤憲一郎氏が1985年に「ネパールの歴史 対インド関係を中心に」を上梓され、また佐伯和彦氏が「ネパール全史」を2003年にまとめておられる。その後者はネパールの古代史、中世史の研究書として優れている。しかるに、ネパールの現代史を書いた者が日本にいない。日本では現代ネパールの政治史を特定の思想でのみみようとする者が多く、その歴史観が正しくない。

著者 Whelpton 氏はネパール語の文献、資料をある程度使用しているとはいえ、本書編纂にあたりやはり英文資料が中心になっている。ネパールにおける教育、研究発表がインドと同様に英語によるものが多い現状では当然そうならざるを得ないのかもしれないが、それにしてもそれらの資料は歴史研究においてはすべて二次資料である。国立の古文書館が完備されていないネパールでは、オリジナルの資料を利用することがかなり困難である。

それにも拘わらず本書は、偏見にとらわれることが多いネパールの近代史、現代史を正しく知りたいという人々にとって絶好の参考書となるだろう。

((社)日本ネパール協会副会長)